

Discussion Paper Series

Graduate School and School of Economics

Meisei University

Discussion Paper Series, No.26

2013年3月

休日の過ごし方は変化しているのか？

－ 『社会生活基本調査』を用いた生活時間の変化の計測－

梶谷真也

(明星大学)

Hodokubo 2-1-1, Hino, Tokyo 191-8506

School of Economics, Meisei University

Phone: 042-591-9479 Fax: 042-599-3024

URL: <http://keizai.meisei-u.ac.jp/econ/>

E-mail: keizai@econ.meisei-u.ac.jp

休日の過ごし方は変化しているのか？*

－『社会生活基本調査』を用いた生活時間の変化の計測－

梶谷真也[†]

要旨

本稿では、日本の大規模タイムユースサーベイのひとつである『社会生活基本調査』の匿名データを用いて、若年層の休日の過ごし方の変化に焦点を当てた分析を行う。具体的には、調査対象者に対して連続する 2 日間の時間配分を尋ねているという『社会生活基本調査』の特性を活かして、15 歳以上 40 歳未満の既卒者について、1) 休みの日の過ごし方にどのような違いが見られるのか、2) 休みの日の過ごし方がこの 20 年でそれぞれどのように変化したのかを計量的に確認する。個人の異質性を考慮しながら分析した結果、1) 男女ともにふだんの日に比べて休日の睡眠時間は長いこと、2) 就業の有無で確認すると、有業者の休日の睡眠時間が年々増加していることが統計的に確認されるのに対して、男性無業者のそれは確認されず、女性無業者のそれは年々減少していることを統計的に確認する。また、3) 有業者の家事・育児時間は男女ともにふだんの日よりも休日のほうが長いのに対して、女性無業者は休日のほうが家事時間と育児時間が短いこと、そして、4) 有業者の休日のスポーツ時間が男女とも年々減少していることが示される。

* 本研究において使用する『社会生活基本調査』の匿名データは、統計法 36 条に基づき、独立行政法人統計センターに提供依頼を申出して承諾を得て提供を受けたものである。本稿に掲載する結果は、筆者が独自に作成・加工した統計であり、総務省統計局が作成・公表している統計等とは異なる。なお、筆者は文部科学省科学研究費補助金(基盤(C)23530328)の支援を受けている。記して感謝の意を表したい。

† 明星大学経済学部 〒191-8506 東京都日野市程久保 2-1-1, kajitani@econ.meisei-u.ac.jp

1. はじめに

Juster and Stafford (1991) や Hamermesh and Pfann (2005) らが時間配分に注目することの重要性を指摘するなど、経済学の分析においてもタイムユースサーベイ (time-use survey) を使った個人の時間配分を分析対象とする研究が蓄積されつつある。日本においても, Yamada et al. (1999), Ueda (2005), 梶谷・小原 (2006), 黒田 (2010), Kuroda (2010), Lee et al. (2011, 2012), Kuroda and Yamamoto (2012) らが日本のタイムユースサーベイのデータを用いた分析を行っている。本稿では, 日本の大規模タイムユースサーベイのひとつである『社会生活基本調査』の匿名データを用いて, 若年層の休日の過ごし方の変化に焦点を当てた分析を行う。具体的には, 調査対象者に対して連続する 2 日間の時間配分を尋ねているという『社会生活基本調査』の特性を活かして, 15 歳以上 40 歳未満の既卒者について, 1) 休みの日の過ごし方にどのような違いが見られるのか, 2) 休みの日の過ごし方がこの 20 年でそれぞれどのように変化したのかを計量的に確認する。

標準的な経済学の分析では消費と余暇から効用を得ると考え, 利用可能な時間のうち労働に費やす時間以外をすべて余暇時間とするのが一般的である。しかし, 余暇の中身について分析することも重要であろう。例えば, 一日の時間の使い方に注目すれば, その多くを費やす睡眠時間について興味が集まる。多くの経済学の分析では睡眠時間を外生変数と仮定するのに対して, Biddle and Hamermesh (1990) は, 個人は消費に加えて睡眠自体から効用を得るだけでなく睡眠が生産性を高めるという立場から, アメリカのタイムユースサーベイのデータを用いて睡眠の需要関数を推定する。そして, 市場賃金率が睡眠時間に負の影響を与えることを明らかにしている。Yamada et al. (1999) も『社会生活基本調査』の集計データを用いて同様の分析を行い, 高齢層では負の影響が観察されるのに対して, 若年層では正の影響が観察されることを確認している。この正の影響について Yamada et al. (1999) は, 睡眠が生産性を上昇させる間接的な効果が賃金上昇による代替効果を上回ることによるものであろうと指摘する。

不効用を伴うという意味では, 労働には市場労働だけでなく家計内生産も含まれる。技術の進化に伴って時間節約型の家計内生産技術を選択しやすくなっており, 家事時間は趨勢的に減少している。余暇時間が増加する理由として Aguiar and Hurst (2007) は, 1965 年から 2003 年までのアメリカのタイムユースサーベイのデータを用いた分析で, 女性は家事時間の減少によるものであることを指摘する。日本においても, Kuroda (2010) が 1976 年から 2006 年までの『社会生活基本調査』のマイクロデータを用いて, フルタイムで働く女性では, 1 週間の平均市場労働時間に大きな変化は見られないものの家計内生産時間が低下した結果, 余暇時間が増加していることを示す。

また, 市場労働時間の変化が生活時間の配分にどのような影響を与えるかについての研究も進んでいる。失業 (市場労働時間がゼロ) 状態の個人の時間配分に注目する Ahn et al. (2005) は, スペインのタイムユースサーベイのデータを用いて, 有業者と比べて失業者は

家事労働時間が長いということを確認する。Aguiar et al. (2013) は 2003 年から 2010 年までのアメリカのタイムユースサーベイのデータを用いて、2007 年から 2010 年までの深刻な不況に伴う市場労働時間の減少がその他の生活時間に与える影響を推計している。そして、労働時間減少分の約 50%が余暇時間（テレビ時間が約 10%、睡眠時間が約 20%、その他が約 20%）に、約 30%が家計生産時間にそれぞれ充てられていることを明らかにする。Lee et al. (2011, 2012) は、法定労働時間の短縮という外生的な政策変更が 1 日の生活時間の使い方にどのような変化をもたらしたのかを日本と韓国のタイムユースサーベイを用いてそれぞれ分析する。日本では 1988 年以降の労働基準法改正により、法定労働時間はそれ以前の 1 日 8 時間・週 48 時間から例外を除いて 1 日 8 時間・週 40 時間に短縮された。『社会生活基本調査』のマイクロデータを用いた日本の分析では、男女とも週末（土曜日・日曜日）で労働時間が大きく減少していることが示される。そして、男女とも労働時間の短縮によって生まれた時間の多くを余暇（特にテレビ視聴等）に充てることに加えて、男性の場合は家庭内生産にも充てることを指摘する。

このように、個人の時間配分の分析には生活時間の中身についての議論が求められるのに加えて、市場労働時間の変化や家計生産に関する技術進歩を考慮する必要がある。また、特定の行動時間は個人の属性によって大きく異なるため、この異質性を考慮しなければいけない。本稿では個人において市場労働時間の変化が顕著にみられる「ふだんの日」と「休みの日」（市場労働を行わない日）の生活時間の使い方の違いに着目し、『社会生活基本調査』の匿名データを用いて休みの日の生活時間に時系列的な変化が見られるかについて、技術進歩の影響を踏まえながら確認する。

『社会生活基本調査』では、同一個人に対して連続する 2 日間のある特定の日について回答者の行動内容を 15 分刻みで尋ねている。この特定の日は、「旅行」「行楽」「行事または冠婚葬祭」「出張研修など」「療養」「休みの日」「その他」に分類される。このうち、「その他」に該当する日を「ふだんの日」と定義する。そして、1 日目を「ふだんの日」と回答したサンプルに限定し、そのうち (1) 2 日目もふだんの日であるサンプルと (2) 2 日目が休みの日であるサンプルとを識別する。そして、観察されない異質性を考慮するために、それぞれのサンプルについて 2 日目と 1 日目の各生活時間の階差をとる。そのうえで、2 日目が休みの日であるサンプルと 2 日目もふだんの日であるサンプルとの間の時間配分に大きな差があるかを計測することで、ふだんの日と比較をした休みの日の過ごし方について考察する。さらに、技術進歩の影響を踏まえながら、その休みの日の過ごし方が時系列的にどのように変化しているかを生活行動の種類ごとに計測する。

個人の異質性を考慮した分析の結果、1) 男女ともにふだんの日に比べて休日の睡眠時間は長いこと、2) 就業の有無で確認すると、有業者の休日の睡眠時間が年々増加していることが統計的に確認されるのに対して、男性無業者のそれは確認されず、女性無業者のそれは年々減少していることが統計的に確認される。また、3) 有業者の家事・育児時間は男女ともにふだんの日よりも休日のほうが長いのに対して、女性無業者は休日のほうが家事時

間と育児時間が短いこと、そして、4) 有業者の休日のスポーツ時間が男女とも年々減少していることが示される。本稿の構成は以下の通りである。続く 2 節で使用する『社会生活基本調査』の概要を説明する。推定モデルを 3 節で示し、4 節でその結果を報告する。そして、5 節で全体をまとめる。

2. データの概要

『社会生活基本調査』は、国民の生活時間の配分や余暇時間における主な活動の状況を明らかにするための基礎資料を得ることを目的として 1976 年から総務省が実施する大規模タイムユースサーベイである。1986 年実施の調査からは、9 月末から 10 月中旬にかけての 9 日間の調査期間において調査区ごとに指定した連続する 2 日間の個人の生活時間を調査する方式を採用している。本稿で用いる『社会生活基本調査』のマイクロデータは、統計法 36 条に基づき、独立行政法人統計センターにデータの提供依頼を行い、承諾を得て提供を受けた 1991 年・1996 年・2001 年・2006 年のプリコード方式の匿名データである¹。

『社会生活基本調査』では、20 項目の生活行動から回答者の行った行動が 15 分単位で記入される。20 項目の生活行動は、「睡眠」「身の回りの用事」「食事」「通勤・通学」「仕事」「学業」「家事」「介護・看護」「育児」「買い物」「移動（通勤・通学を除く）」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「休養・くつろぎ」「学習・研究（学業以外）」「趣味・娯楽」「スポーツ」「社会的活動」「交際・付き合い」「受診・療養」「その他」に分類されている。本稿では、若年層の生活時間に注目するため、15 歳から 39 歳までの回答者にサンプルを限定する。

若年層（15–39 歳）における生活時間の変化をふだんの日・休みの日に分けて時系列で確認していこう。「睡眠」「仕事」「家事」「育児」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「趣味・娯楽」「スポーツ」「社会的活動」について、「ふだんの日」と「休みの日」それぞれにおける総平均時間を図表 1 にまとめている²。総平均時間とは、該当する種類の行動をしなかった人を含む全員についての平均値である。最初に、ふだんの日における仕事時間を確認する。男性は 1991 年の 548.1 分から 2006 年の 536.8 分へと減少傾向にあるのに対して、女性は 1991 年の 279.8 分から 2006 年の 288.3 分へと増加傾向にあることがわかる。『労働力調査』（総務省）から 15–39 歳女性の労働力率を計算すると、1991 年が 53.5%、1996 年が 55.7%、2001 年が 57.8%、2006 年が 59.6%と年々上昇している。このことは女性の仕事時間の増加と一致している。一方で、男性の仕事時間の減少傾向は、男性の雇用形態の多様化など

¹ 『社会生活基本調査』の匿名データは、全体の 80%をリサンプリングした上で提供されている。マイクロデータから個人や世帯の特定化を避けるため、年齢は 5 歳刻み、年齢区分は 85 歳以上でトップコーディング、8 人以上の世帯・三つ子以上の子供がいる世帯は削除といった措置が取られている。なお、匿名データとして提供されているのはアフターコード方式のデータのみである。

² 各行動に関する具体例は付表にまとめている。

が反映していると指摘される。例えば、Kuroda (2010) はフルタイム（週 35 時間以上）の男性雇用者の仕事を時間を確認し、仕事時間の減少傾向は観察されないことを指摘する。そこで、週労働時間が 35 時間以上と回答するサンプルに限定して仕事時間を確認しよう。パネル B で示すように、1991 年のふだんの日における仕事時間は 561.8 分であるのに対して、2006 年のそれは 583.6 分と年々上昇していることがわかる。最後に、休みの日における仕事時間を確認すると、男性で 1991 年の 23.7 分、2006 年の 19.4 分、女性で 1991 年の 13.5 分、2006 年の 13.4 分となっている。休みの日の仕事時間はゼロとはいえないものの、ふだんの日と比べれば平均的に非常に短い時間である。

次に、男性の睡眠時間についてパネル A で確認すると、ふだんの日では 1991 年の 444.3 分から 2006 年の 439.0 分へと減少傾向にあるのに対して、休みの日では 1991 年の 437.9 分から 2006 年の 540.8 分へと増加傾向にある。一方、女性では、ふだんの日の睡眠時間は変化がないのに対して、休みの日では 1991 年の 502.0 分から 2006 年の 513.3 分へと増加している。このように、男女ともにふだんの日に比べて休日の睡眠時間は長く、休日の睡眠時間が年々増えていることがわかる。

家庭内生産に目を向けると、育児や家事に費やす時間は男女でその水準自体に大きな差がみられるものの、男性の育児・家事時間はふだんの日、休みの日ともに年々増加傾向にある。男性は、ふだんの日で 1991 年の 2.5 分から 2006 年の 5.5 分へとわずかな増加だが、休みの日で 1991 年の 17.2 分から 2006 年の 31.9 分と 15 分ほど長くなっている。一方、女性では、育児時間は増加しているのに対して家事時間は減少している。育児時間は、ふだんの日で 1991 年の 63.4 分から 2006 年の 74.5 分、休みの日で 1991 年の 38.5 分から 2006 年の 48.7 分へと変化しているのに対して、家事時間はふだんの日で 1991 年の 165.1 分から 2006 年の 127.2 分へ、休みの日で 1991 年の 158.8 分から 2006 年の 120.8 分へとそれぞれ減少している。女性における家事時間の減少はフルタイムで働く女性にサンプルを限定した場合でも確認される。全体とフルタイムのみサンプルでの家事時間の水準自体には大きな差が生じているものの、ふだんの日で 1991 年の 68.2 分から 2006 年の 43.0 分に、休みの日で 1991 年の 130.0 分から 2006 年の 93.8 分にそれぞれ低下している。このことは、時間節約型の家計内生産技術を選択しやすく家計内生産時間が低下し余暇時間が増加するという Aguiar and Hurst (2007) や Kuroda (2010) の指摘と一致する。

その他の生活時間では、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌に費やす時間が男女ともにふだんの日と休みの日の両方で減少しているのに対して、趣味・娯楽時間はふだんの日と休みの日の両方とも増加している。一方、スポーツ時間をみると、ふだんの日では時系列的な変化はほとんどないが、休みの日では減少傾向が観察される。個人の主体的な健康づくりを支援する「21 世紀における国民健康づくり運動（健康日本 21）」が推進されるなど、人々の中でスポーツへの取り組みが盛んになっていると印象を抱きがちであるが、15 歳から 39 歳までの若年層については運動への取り組みはそれほど高くないのかもしれない。

以上をまとめると、ふだんの日と休みの日との時間配分で大きく異なるのは仕事時間で

あり、睡眠や家事、育児、趣味・娯楽、スポーツなどの余暇に費やす時間が休みの日は長い。そして、休みの日における余暇に費やす時間は時系列的に変化がみられる。それでは、人々はふだんの日と比べて休みの日にどの行動にどのぐらい時間を配分しているのだろうか。その配分に時系列的な変化がみられるのだろうか。この点を詳細に分析するには、個人の異質性の影響などを考慮する必要がある。そこで、次節ではこれらの影響を考慮する推定モデルを示し、休日の時間配分の変化について議論を進める。

3. 推定モデル

個人*i*について、行動内容ごとに余暇に費やす時間決定式が以下のように書けるとする。

$$R_{id} = \mathbf{X}_i \boldsymbol{\alpha} + \beta \text{Day}_{id} + \mu_i + \varphi + \varepsilon_{id} \quad (1)$$

R は余暇時間、 \mathbf{X} は余暇時間の決定に与える個人の観察される異質性、 Day はふだんの日か休みの日かを表すダミー変数、 μ は個人の観察されない異質性、 φ は家計内生産に関する技術水準の要素を含む定数項、 ε は誤差項をそれぞれ表す。『社会生活基本調査』からは、同一個人について連続する2日間の行動時間が得られるため、個人*i*について1日目 ($d = 1$) と2日目 ($d = 2$) の時間決定式をそれぞれ示すことができる。連続する2日間の余暇時間の階差を取ると、(1) 式は

$$\Delta R_i = R_{i2} - R_{i1} = \gamma(\text{Day}_{i2} - \text{Day}_{i1}) + (\varepsilon_{i2} - \varepsilon_{i1}) = \gamma \text{Day}_i + \varepsilon_i \quad (2)$$

となる。(2) 式の ΔR は2日目の余暇時間から1日目の余暇時間を引いたもの、 Day は2日目が休みの日であるかどうかを示すダミー変数である。(2) 式は階差を取っていることから、個人*i*の観察される異質性 \mathbf{X} と観察されない異質性 μ 定数項 φ は消去される。本稿で用いる『社会生活基本調査』の匿名データは1991年、1996年、2001年、2006年のデータセットであることから、(2) 式はそれぞれ

$$\Delta R_{i,1991} = \gamma \text{Day}_{i,1991} + \varepsilon_{i,1991} \quad (2a)$$

$$\Delta R_{i,1996} = \gamma \text{Day}_{i,1996} + \varepsilon_{i,1996} \quad (2b)$$

$$\Delta R_{i,2001} = \gamma \text{Day}_{i,2001} + \varepsilon_{i,2001} \quad (2c)$$

$$\Delta R_{i,2006} = \gamma \text{Day}_{i,2006} + \varepsilon_{i,2006} \quad (2d)$$

と書ける。1991年をベンチマークとした年ダミーの変数と2日目の曜日ダミーをそれぞれ加えて、(2a) 式から(2d) 式をまとめると、

$$\Delta R_i = \gamma_1 Day_i + \gamma_2 Day_i D1996_i + \gamma_3 Day_i D2001_i + \gamma_4 Day_i D2006_i + \delta_2 D1996_i + \delta_3 D2001_i + \delta_4 D2006_i + \theta_1 Dmon_i + \theta_2 DTus_i + \theta_3 DWed_i + \theta_4 DThu_i + \theta_5 DFri_i + \theta_6 DSat_i + \epsilon_i \quad (3)$$

と書き表すことになる。各年ダミーは時点の違いの影響をそれぞれ捉えており、家計内生産に関する技術水準の違いの影響も含まれる。また、曜日の効果をコントロールするために2日目の曜日ダミーを説明変数として含める。 γ_1 はふだんの日と比べた休みの日の余暇時間の変化を表す。 γ_2 は1991年をベンチマークとした場合の1996年におけるふだんの日と比べた休みの日の余暇時間の変化、 γ_3 は2001年におけるふだんの日と比べた休みの日の余暇時間の変化、 γ_4 は2006年におけるふだんの日と比べた休みの日の余暇時間の変化をそれぞれ表す。本稿では、「睡眠」「仕事」「家事」「育児」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「趣味・娯楽」「スポーツ」「社会的活動」それぞれに費やす時間を(3)式に当てはめてそれぞれ推定する³。

推定で用いる変数の定義と記述統計量を図表2に示す。2日目が休みの日であると回答する割合は男性で18%、女性で14%となっている。また、連続する2日の調査曜日は、月火と水木の組み合わせがほぼ0%である⁴。観察される個人属性で分析対象サンプルの状況を確認すると、ふだん仕事をしている人の割合は男性で96%であるのに対して、女性では63%、最終学歴が大卒・大学院卒の割合は男性が27%、女性が11%である。世帯の年間収入では、300万円以上600万円未満の割合が男女とも約45%、600万円以上の割合は男女とも約40%、配偶者の有無は、男性で47%、女性で59%が配偶者ありと回答している。

4. 推定結果：休みの日の時間配分

図表3に男女別の推定結果を示している。まず「睡眠」「家事」「育児」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「趣味・娯楽」「スポーツ」「社会的活動」それぞれに費やす時間は休みの日のほうがふだんの日よりも長いことが統計的に有意に観察される。特に、生活行動ごとにみると、男性の場合では睡眠時間とテレビ視聴等に費やす時間、趣味・娯楽時間で大きな増加になっている。女性の場合でも睡眠時間やテレビ視聴等に費やす時間、趣味・娯楽時間で大きな増加となっているのに加えて、家事時間の増加も確認される。市場労働に費やす時間だけ時間制約が緩くなることでこれらの生活時間が増加しているのだろう。しかし、これらの結果を時系列での変化に注目すると、生活行動ごとに異なる動きを示す。まず、

³ 推定では『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウエイト付けする。

⁴ 『社会生活基本調査』では、曜日ごとの結果を集計するため、土日、日月、火水、木金、金土を調査曜日の組み合わせとしている。

男女ともに休みの日の睡眠時間は年々増加していることを統計的に有意に確認できる。1991年と比較して2006年では男性で25分、女性で18分ほど睡眠時間が長い。一方で、男女ともに休みの日のスポーツ時間は年々減少していることを統計的に有意に観察できる。また、休日に費やす育児時間では、男女ともに1991年と比較した場合2006年で育児時間が長いことが確認される。

ただし、サンプルを有業者と無業者に分けて分析すると、両者の結果に大きな差が生じる。図表4パネルAに示すように、男性有業者（パネルA1）や男性フルタイム労働者（パネルA2）では休みの日の睡眠時間が年々増加していることを統計的に有意に確認できるのに対して、男性無業者（パネルA3）では確認されない。また、男性無業者では家事、育児、テレビ視聴等、趣味・娯楽、スポーツ、社会的活動それぞれに費やす時間は休みの日とふだんの日とに差はない。男性無業者については、ふだんの日に市場労働を行っているわけではないため、ふだんの日と休みの日との間に大きな時間配分の変化は生じにくいと考えられる。

パネルBに示すように、女性有業者（パネルB1）や女性フルタイム労働者（パネルB2）においても休みの日の睡眠時間は年々増加しているのに対して、女性無業者（パネルB3）では年々減少していることが統計的に有意に確認される。さらに、女性無業者では家事や育児に費やす時間が休みの日のほうが短いことを統計的に有意に確認できる。ただし、女性無業者には多く含まれる専業主婦にとっては、ふだんの日に市場労働をするわけではなく、家事や育児に従事している。パネルB3の(2)列と(3)列の係数 γ_1 の符号は、家事時間や育児時間が休みの日のほうが短いということを示しているのであり、休みの日の家事時間や育児時間の水準が短いということの意味しているわけではない。

ふだんの日には市場労働時間が大きな時間制約となるが、休みの日にはその制約がない。個人において休みの日が外生的に与えられるものであると捉えるならば、休みの日の時間配分は、ふだん市場労働に費やす時間をどのような生活行動に充てるのかという問題として解釈できる。上記の推定結果からは、人々はふだんの日の市場労働時間に相当する時間の多くを睡眠、テレビの視聴、趣味・娯楽に充てていることがわかった。また、女性では家事生産活動にも多くの時間を充てていることが分かった。これらの余暇時間と市場労働時間との負の相関の強さは、ふだんの日においても観察されるのだろうか。すなわち、ふだんの日において仕事時間の長い人は睡眠時間やテレビの視聴、趣味・娯楽に充てる時間、家事時間がより短いといえるのだろうか。図表5には、1991年、1996年、2001年、2006年のふだんの日における仕事時間と余暇時間との相関係数を示している。男性では、睡眠時間、テレビ視聴等の時間、趣味や娯楽に費やす時間との相関が強いことがわかる。一方で、女性では家事時間や育児時間との相関が強いことがわかる。

5. おわりに

若年層の休日の過ごし方はこの20年でどのように変化したのだろうか。本稿では、日本の大規模タイムユースサーベイのひとつである『社会生活基本調査』の匿名データを用いて、15歳以上40歳未満の既卒者について、1) 休みの日の過ごし方にどのような違いが見られるのか、2) 休みの日の過ごし方がこの20年でそれぞれどのように変化したのかを計量的に確認した。個人の異質性を考慮しながら分析して、1) 男女ともにふだんの日に比べて休日の睡眠時間は長いこと、2) 就業の有無で確認すると、有業者の休日の睡眠時間が年々増加しているのに対して、男性無業者のそれは確認されず、女性無業者のそれは年々減少していることを確認した。また、3) 有業者の家事・育児時間は男女ともにふだんの日よりも休日のほうが長いのに対して、女性無業者は休日のほうが家事時間と育児時間が短いこと、そして、4) 有業者の休日のスポーツ時間が男女とも年々減少していることを示した。

本稿ではふだんの日と休みの日との違いに注目したが、休みの日が外生的に与えられたものとして考えれば、ふだんの日の市場労働時間に相当する時間の多くは、男女ともに睡眠、テレビの視聴や趣味・娯楽に充てられる一方で、女性では家事生産活動にも充てられている。さらに、これらの生活行動は時系列的に変化しており、睡眠により時間を配分する傾向にあるといえる。ただし、個人が休みの日を選択できる可能性を考えるならば、平日か土日といったようにより外生的な状況での比較を行う必要もあろう。この点については、今後の検討課題としたい。

参考文献

- Ahn, N., J. F. Jimeno and A. Ugidos (2005) "Mondays in the Sun: Unemployment, Time Use, and Consumption Patterns in Spain," in Hamermesh, D. S. and G. A. Pfann Eds. *The Economics of Time Use*, Amsterdam: Elsevier.
- Aguiar, M. and E. Hurst (2007) "Measuring Trends in Leisure: the Allocation of Time Over Five Decades," *The Quarterly Journal of Economics* 122(3), pp. 969–1006.
- Aguiar M., E. Hurst, and L. Karabarbounis (2013) "Time Use During the Great Recession," *American Economic Review* 103(5), pp. 1664–1696.
- Asgeirsdottir, T. L. and G. Zoega (2011) "On the Economics of Sleeping," *Mind and Society* 10, pp. 149–164.
- Biddle, J. and D. S. Hamermesh (1990) "Sleep and the Allocation of Time," *Journal of Political Economy* 98(5), pp. 922–943.
- J. I. Gimenez-Nadal and A. Sevilla (2012) "Trends in time allocation: A cross-country analysis," *European Economic Review* 56(6) pp. 1338–1359.
- Hamermesh, D. S. and G. A. Pfann (2005) *The Economics of Time Use*, Amsterdam:

Elsevier.

- Kuroda, S. and I. Yamamoto (2012) “The Era of the 24-hour Society?: Assessing Changes in Work Timing Using a Japanese Time Use Survey,” *Applied Economics Letters* 19, pp. 1035–1038.
- Juster, F. T. and F. P. Stafford (1991) “The Allocation of Time: Empirical Findings, Behavioral Models, and Problems of Measurement,” *Journal of Economic Literature* 29(2), pp. 471–522.
- Lee, J., D. Kawaguchi and D. S. Hamermesh (2011) “Aggregate Impacts of a Gift of Time,” *NBER Working Paper Series* 17649.
- Lee, J., D. Kawaguchi and D. S. Hamermesh (2012) “Aggregate Impacts of a Gift of Time,” *American Economics Review: Paper and Proceedings* 102(3), pp. 612–616.
- Ueda, A. (2005) “Intrafamily Time Allocation of Housework: Evidence from Japan,” *Journal of the Japanese and International Economies* 19(1), pp. 1–23.
- Yamada, T., T. Yamada and J. M. Kang (1999) “A Study of Time Allocation of Japanese Households,” *Japan and the World Economy* 11, pp. 41–55.
- 梶谷真也・小原美紀 (2006) 「有業者の余暇時間と健康投資」『日本労働研究雑誌』 no. 552, pp. 44–59.
- 黒田祥子 (2010) 「生活時間の長期的な推移」『日本労働研究雑誌』 no. 599, pp. 53–64.

図表1 ふだんの日と休みの日の各生活時間の総平均時間(分)

パネルA								
	仕事	睡眠	家事	育児	テレビ等	趣味・娯楽	スポーツ	社会的活動
男性								
ふだんの日								
1991年	548.1	444.3	2.7	2.5	106.1	19.8	4.4	2.3
1996年	544.5	441.2	2.7	3.0	109.3	22.6	4.5	1.3
2001年	533.8	437.6	3.2	4.7	101.1	29.5	4.5	1.6
2006年	536.8	439.0	4.2	5.5	90.6	33.5	4.7	1.4
休みの日								
1991年	23.7	538.4	17.7	17.2	222.0	113.7	34.4	8.3
1996年	28.6	545.0	12.8	14.6	230.6	113.2	28.9	4.7
2001年	20.6	546.2	14.0	18.3	207.7	127.4	18.2	6.0
2006年	19.4	540.8	21.0	31.9	174.7	129.4	23.9	4.9
女性								
ふだんの日								
1991年	279.8	437.9	165.1	63.4	109.7	20.7	4.7	3.2
1996年	279.5	438.2	149.5	60.8	117.4	17.3	4.2	2.0
2001年	281.2	439.8	135.7	72.5	105.0	21.5	3.8	2.3
2006年	288.3	437.7	127.2	74.5	98.6	26.5	4.1	1.6
休みの日								
1991年	13.5	502.0	158.8	38.5	160.9	57.9	15.1	7.3
1996年	14.0	514.8	139.0	37.5	174.7	52.1	10.8	3.3
2001年	10.9	513.7	132.4	43.1	157.8	61.4	10.5	4.5
2006年	13.4	513.3	120.8	48.7	141.5	73.4	9.4	4.8

パネルB:週労働時間35時間以上

	仕事	睡眠	家事	育児	テレビ等	趣味・娯楽	スポーツ	社会的活動
男性								
ふだんの日								
1991年	561.8	442.3	2.4	2.5	102.3	18.2	4.3	2.2
1996年	569.3	437.5	1.9	3.0	102.3	19.7	4.3	1.3
2001年	574.0	431.1	2.3	5.1	88.9	23.3	4.0	1.3
2006年	583.6	431.3	3.0	6.2	75.7	25.6	4.3	1.0
休みの日								
1991年	24.2	536.8	18.6	17.6	220.6	114.4	34.5	8.6
1996年	29.5	543.3	12.9	15.5	227.1	113.7	30.3	4.7
2001年	21.9	547.7	14.1	20.0	203.9	123.5	19.1	6.4
2006年	19.4	541.3	21.9	33.9	170.6	129.0	24.9	5.3
女性								
ふだんの日								
1991年	477.5	432.3	68.2	11.5	88.4	15.0	3.7	1.3
1996年	491.4	432.5	51.9	9.1	88.8	11.6	3.5	0.8
2001年	493.1	429.6	45.3	11.4	80.3	15.5	3.6	0.7
2006年	507.1	426.0	43.0	14.4	73.1	16.5	2.9	0.7
休みの日								
1991年	15.0	514.3	130.0	28.6	163.9	63.1	14.7	6.5
1996年	16.7	528.2	98.8	22.6	181.6	57.6	12.3	2.5
2001年	12.8	527.4	99.0	30.3	166.4	63.3	11.3	4.1
2006年	15.1	524.0	93.8	42.3	145.9	76.2	10.5	3.7

出所:『社会生活基本調査』匿名データから筆者作成.

注1)人口乗率でウエイト付けしている.

図表2 変数の定義と記述統計量

変数名	定義	男性 サンプルサイズ=51944				女性 サンプルサイズ=57069			
		平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大
<i>ASleep</i>	2日目の睡眠時間－1日目の睡眠時間(分)	19.74	115.80	-765	1035	10.17	90.92	-795	885
<i>AHousework</i>	2日目の家事時間－1日目の家事時間(分)	2.34	29.94	-600	900	3.38	93.60	-780	810
<i>AChildcare</i>	2日目の育児時間－1日目の育児時間(分)	3.04	33.42	-690	810	-1.84	72.47	-900	780
<i>AWatching TV</i>	2日目のテレビ・ラジオ・新聞・雑誌時間－1日目のテレビ・ラジオ・新聞・雑誌時間(分)	20.07	118.85	-855	960	8.46	102.38	-900	810
<i>AHobbies</i>	2日目の趣味・娯楽時間－1日目の趣味・娯楽時間(分)	17.33	105.64	-915	1275	6.46	75.85	-810	945
<i>ASports</i>	2日目のスポーツ時間－1日目のスポーツ時間(分)	4.86	50.01	-615	1155	1.61	40.15	-525	780
<i>AVolunteer</i>	2日目の社会的活動時間－1日目の社会的活動時間(分)	0.91	28.66	-900	825	0.75	32.28	-765	1035
<i>Day</i>	2日目がお休みの日=1, それ以外=0	0.18	0.39	0	1	0.14	0.35	0	1
<i>D1996</i>	1996年ダミー	0.27	0.44	0	1	0.27	0.45	0	1
<i>D2001</i>	2001年ダミー	0.23	0.42	0	1	0.22	0.41	0	1
<i>D2006</i>	2006年ダミー	0.22	0.42	0	1	0.21	0.41	0	1
<i>DMon</i>	2日目がお月曜日ダミー	0.07	0.25	0	1	0.09	0.29	0	1
<i>DTue</i>	2日目がお火曜日ダミー	0.00	0.02	0	1	0.00	0.02	0	1
<i>DWed</i>	2日目がお水曜日ダミー	0.42	0.49	0	1	0.41	0.49	0	1
<i>DThu</i>	2日目がお木曜日ダミー	0.00	0.02	0	1	0.00	0.03	0	1
<i>DFri</i>	2日目がお金曜日ダミー	0.21	0.41	0	1	0.20	0.40	0	1
<i>DSat</i>	2日目がお土曜日ダミー	0.08	0.28	0	1	0.08	0.27	0	1
就業状態	ふだん仕事をしている(有業)=1, 仕事をしていない(無業)=0	0.96	0.21	0	1	0.63	0.48	0	1
大卒・院卒	最終学歴が大学・大学院=1, それ以外=0	0.27	0.44	0	1	0.11	0.32	0	1
世帯の年間収入	世帯の年間収入が300万円未満をベンチマーク								
300万～599万円	世帯の年間収入が300万から599万円未満=1, それ以外=0	0.46	0.50	0	1	0.43	0.50	0	1
600万円以上	世帯の年間収入が900万円以上=1, それ以外=0	0.37	0.48	0	1	0.39	0.49	0	1
配偶者の有無	有配偶=1, 未婚・死別・離別=0	0.47	0.50	0	1	0.59	0.49	0	1

注) 記述統計量は『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウエイト付けして算出している。

図表3 推定結果

パネルA 男性

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	$\Delta Sleep$	$\Delta Housework$	$\Delta Childcare$	$\Delta Watching TV$	$\Delta Hobbies$	$\Delta Sports$	$\Delta Volunteer$
Day	107.824 *** [3.163]	13.702 *** [1.474]	12.541 *** [1.216]	107.319 *** [3.199]	80.638 *** [3.685]	27.951 *** [1.950]	6.700 *** [0.783]
Day*D1996	8.169 [5.745]	-6.110 *** [1.701]	-0.222 [1.785]	5.133 [5.330]	-6.699 [5.196]	-7.499 *** [2.658]	-4.351 *** [1.141]
Day*D2001	12.942 ** [5.941]	-5.032 *** [1.831]	-0.005 [2.065]	-11.914 ** [6.009]	2.633 [7.102]	-12.372 *** [3.224]	-3.724 *** [1.138]
Day*D2006	24.703 *** [6.802]	0.775 [4.476]	6.237 ** [2.628]	-17.190 ** [7.005]	19.319 ** [8.602]	-12.821 *** [3.114]	-3.464 ** [1.495]
サンプルサイズ	51944	51944	51944	51944	51944	51944	51944
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	292.8 ***	29.63 ***	35.54 ***	243.3 ***	144.0 ***	45.69 ***	10.63 ***
決定係数	0.192	0.029	0.036	0.147	0.126	0.037	0.006

パネルB 女性

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	$\Delta Sleep$	$\Delta Housework$	$\Delta Childcare$	$\Delta Watching TV$	$\Delta Hobbies$	$\Delta Sports$	$\Delta Volunteer$
Day	76.497 *** [2.179]	36.326 *** [2.509]	4.198 *** [1.310]	53.171 *** [2.748]	38.983 *** [2.438]	14.598 *** [1.351]	5.164 *** [1.029]
Day*D1996	6.865 [4.282]	-5.618 [3.937]	-2.108 [2.197]	9.236 * [5.236]	-8.148 ** [3.627]	-7.740 *** [1.793]	-6.764 ** [2.723]
Day*D2001	9.892 * [5.202]	1.568 [4.728]	1.514 [2.462]	-5.188 [5.511]	-2.805 [4.652]	-8.064 *** [2.707]	-1.116 [2.686]
Day*D2006	17.880 *** [6.934]	13.547 ** [5.521]	14.924 *** [2.838]	10.465 * [5.957]	6.949 [5.518]	-9.250 *** [2.920]	-1.210 [1.581]
サンプルサイズ	57069	57069	57069	57069	57069	57069	57069
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	252.2 ***	47.99 ***	10.97 ***	77.50 ***	58.55 ***	17.44 ***	6.201 ***
決定係数	0.132	0.032	0.005	0.048	0.040	0.012	0.004

注1)『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウェイト付けした結果を掲載している。なお、D1996、D2001、D2006、DMon、DTue、DWed、DThu、DFri、Dsatの推定結果は掲載を省略している。

注2) []内の数値は標準誤差である。

注3) *, **, ***はそれぞれ有意水準10%, 5%, 1%で統計的に有意であることを示す。

図表4 推定結果

パネルA1 男性・有業

	(1) <i>ΔSleep</i>	(2) <i>ΔHousework</i>	(3) <i>ΔChildcare</i>	(4) <i>ΔWatching TV</i>	(5) <i>ΔHobbies</i>	(6) <i>ΔSports</i>	(7) <i>ΔVolunteer</i>
<i>Day</i>	108.200 *** [3.190]	13.896 *** [1.491]	12.733 *** [1.232]	107.966 *** [3.221]	81.337 *** [3.721]	28.361 *** [1.973]	6.848 *** [0.794]
<i>Day*D1996</i>	8.876 [5.819]	-6.202 *** [1.715]	-0.335 [1.812]	5.221 [5.372]	-6.608 [5.218]	-7.871 *** [2.691]	-4.510 *** [1.160]
<i>Day*D2001</i>	13.363 ** [6.010]	-5.076 *** [1.846]	-0.044 [2.095]	-11.883 ** [6.023]	1.451 [7.165]	-13.146 *** [3.227]	-4.021 *** [1.151]
<i>Day*D2006</i>	24.616 *** [6.859]	0.366 [4.497]	5.941 ** [2.647]	-18.355 *** [7.043]	18.702 ** [8.643]	-13.316 *** [3.139]	-3.618 ** [1.512]
サンプルサイズ	49652	49652	49652	49652	49652	49652	49652
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	290.2 ***	31.92 ***	36.01 ***	245.1 ***	145.6 ***	45.98 ***	10.51 ***
決定係数	0.198	0.032	0.037	0.158	0.138	0.039	0.006

パネルA2 男性・週労働時間35時間以上

	(1) <i>ΔSleep</i>	(2) <i>ΔHousework</i>	(3) <i>ΔChildcare</i>	(4) <i>ΔWatching TV</i>	(5) <i>ΔHobbies</i>	(6) <i>ΔSports</i>	(7) <i>ΔVolunteer</i>
<i>Day</i>	107.155 *** [3.446]	14.922 *** [1.655]	13.305 *** [1.311]	107.483 *** [3.331]	81.372 *** [4.015]	27.587 *** [2.050]	7.157 *** [0.874]
<i>Day*D1996</i>	8.461 [5.976]	-7.229 *** [1.845]	-0.154 [1.951]	4.916 [5.555]	-5.927 [5.558]	-6.643 ** [2.804]	-4.195 *** [1.249]
<i>Day*D2001</i>	17.820 *** [6.353]	-5.977 *** [2.027]	-0.277 [2.267]	-11.430 * [6.273]	-1.134 [7.178]	-11.590 *** [3.516]	-4.522 *** [1.251]
<i>Day*D2006</i>	25.507 *** [7.367]	0.004 [5.152]	5.106 * [2.879]	-17.407 ** [7.547]	22.239 ** [9.537]	-12.073 *** [3.371]	-3.608 ** [1.695]
サンプルサイズ	43886	43886	43886	43886	43886	43886	43886
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	257.6 ***	30.26 ***	32.97 ***	224.2 ***	130.7 ***	41.95 ***	9.593 ***
決定係数	0.206	0.033	0.038	0.162	0.142	0.039	0.007

パネルA3 男性・無業

	(1) <i>ΔSleep</i>	(2) <i>ΔHousework</i>	(3) <i>ΔChildcare</i>	(4) <i>ΔWatching TV</i>	(5) <i>ΔHobbies</i>	(6) <i>ΔSports</i>	(7) <i>ΔVolunteer</i>
<i>Day</i>	82.518 *** [21.482]	1.856 [3.182]	-0.002 [0.042]	63.095 ** [27.091]	19.168 [16.146]	-3.237 [5.529]	-1.974 [1.950]
<i>Day*D1996</i>	-37.639 [29.443]	-5.030 [7.382]	3.345 [2.392]	-27.729 [34.381]	-19.287 [25.814]	19.272 * [9.952]	2.879 [2.142]
<i>Day*D2001</i>	16.272 [39.717]	4.979 [10.621]	-1.211 [1.388]	-74.233 [45.408]	46.360 [43.591]	50.979 [37.910]	11.591 [9.741]
<i>Day*D2006</i>	-55.050 [38.580]	34.080 [21.178]	0.180 [1.368]	31.012 [63.517]	-38.464 [30.638]	3.883 [6.994]	-0.252 [2.411]
サンプルサイズ	2292	2292	2292	2292	2292	2292	2292
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	169.2 ***	1.144	0.793	19.85 ***	550.0 ***	0.917	0.922
決定係数	0.035	0.010	0.008	0.007	0.008	0.016	0.004

注1)『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウエイト付けした結果を掲載している。なお、*D1996*, *D2001*, *D2006*, *DMon*, *DTue*, *DWed*, *DThu*, *DFri*, *Dsat* の推定結果は掲載を省略している。

注2) []内の数値は標準誤差である。

注3) *, **, ***はそれぞれ有意水準10%, 5%, 1%で統計的に有意であることを示す。

図表4 推定結果 (続き)

パネルB1 女性・有業

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	$\Delta Sleep$	$\Delta Housework$	$\Delta Childcare$	$\Delta Watching TV$	$\Delta Hobbies$	$\Delta Sports$	$\Delta Volunteer$
Day	77.606 *** [2.370]	50.654 *** [2.563]	9.766 *** [1.231]	59.466 *** [2.952]	40.844 *** [2.581]	14.846 *** [1.432]	5.942 *** [1.091]
Day*D1996	15.011 *** [4.910]	-8.191 ** [3.980]	-3.855 ** [1.812]	13.422 ** [5.873]	-6.660 * [4.002]	-6.814 *** [1.969]	-6.769 ** [3.230]
Day*D2001	18.930 *** [5.873]	-6.117 [5.040]	-6.655 *** [2.206]	-2.165 [6.149]	-2.182 [5.117]	-7.674 ** [3.029]	-1.388 [3.040]
Day*D2006	23.530 *** [7.316]	-3.781 [5.629]	2.540 [2.532]	4.160 [6.204]	5.632 [5.675]	-9.091 *** [3.043]	-2.225 [1.640]
サンプルサイズ	36657	36657	36657	36657	36657	36657	36657
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	223.0 ***	78.11 ***	12.07 ***	88.66 ***	58.75 ***	15.67 ***	6.535 ***
決定係数	0.176	0.071	0.008	0.087	0.069	0.015	0.007

パネルB2 女性・週労働時間35時間以上

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	$\Delta Sleep$	$\Delta Housework$	$\Delta Childcare$	$\Delta Watching TV$	$\Delta Hobbies$	$\Delta Sports$	$\Delta Volunteer$
Day	85.199 *** [2.759]	61.890 *** [2.886]	10.961 *** [1.300]	64.805 *** [3.439]	43.838 *** [3.128]	14.403 *** [1.483]	5.298 *** [0.845]
Day*D1996	13.857 *** [5.293]	-13.446 *** [4.379]	-5.026 *** [1.838]	16.170 ** [6.577]	-6.959 [4.780]	-7.581 *** [2.105]	-4.166 *** [1.151]
Day*D2001	31.024 *** [7.431]	-10.114 * [6.146]	-5.713 ** [2.286]	-0.377 [7.575]	-5.542 [5.826]	-5.962 [4.137]	0.649 [4.301]
Day*D2006	30.042 *** [8.229]	-17.848 *** [5.860]	-1.969 [2.445]	7.589 [7.897]	7.505 [6.986]	-5.414 [3.807]	-1.644 [1.605]
サンプルサイズ	26188	26188	26188	26188	26188	26188	26188
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	204.1 ***	90.72 ***	12.27 ***	77.23 ***	49.77 ***	13.53 ***	5.259 ***
決定係数	0.209	0.117	0.013	0.108	0.081	0.018	0.007

パネルB3 女性・無業

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	$\Delta Sleep$	$\Delta Housework$	$\Delta Childcare$	$\Delta Watching TV$	$\Delta Hobbies$	$\Delta Sports$	$\Delta Volunteer$
Day	54.002 *** [5.165]	-71.167 *** [6.665]	-34.070 *** [6.056]	0.597 [6.090]	15.300 ** [6.281]	11.358 *** [3.911]	-1.893 [2.968]
Day*D1996	-14.037 * [7.699]	29.065 *** [10.392]	2.694 [8.593]	3.589 [10.533]	-5.504 [7.967]	-7.644 * [4.564]	-1.012 [3.287]
Day*D2001	-17.454 ** [8.717]	29.780 *** [10.805]	21.584 ** [9.492]	-14.248 [9.656]	1.024 [9.628]	-8.011 [5.053]	0.516 [3.657]
Day*D2006	-65.356 *** [7.157]	-7.443 [11.696]	30.084 * [15.861]	63.301 *** [23.490]	-18.960 *** [6.950]	-12.470 *** [4.020]	1.875 [3.025]
サンプルサイズ	20412	20412	20412	20412	20412	20412	20412
F-test H_0 : すべての係数がゼロ	37.20 ***	38.60 ***	18.76 ***	2.783 ***	3.648 ***	3.593 ***	1.491
決定係数	0.045	0.041	0.019	0.004	0.008	0.007	0.003

注1)『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウエイト付けした結果を掲載している。なお、D1996、D2001、D2006、DMon、DTue、DWed、DThu、DFri、Dsatの推定結果は掲載を省略している。

注2) []内の数値は標準誤差である。

注3) *, **, ***はそれぞれ有意水準10%, 5%, 1%で統計的に有意であることを示す。

図表5 仕事時間と余暇時間との間の相関係数(ふだんの日)

	1991年	1996年	2001年	2006年
男性				
睡眠	-0.32	-0.37	-0.37	-0.37
家事	-0.14	-0.18	-0.18	-0.20
育児	-0.08	-0.07	-0.07	-0.11
テレビ等	-0.40	-0.40	-0.44	-0.44
趣味・娯楽	-0.26	-0.30	-0.33	-0.34
スポーツ	-0.12	-0.16	-0.13	-0.12
社会的活動	-0.08	-0.06	-0.08	-0.08
女性				
睡眠	-0.11	-0.14	-0.18	-0.19
家事	-0.67	-0.65	-0.64	-0.61
育児	-0.48	-0.46	-0.50	-0.48
テレビ等	-0.26	-0.30	-0.26	-0.25
趣味・娯楽	-0.15	-0.14	-0.14	-0.17
スポーツ	-0.06	-0.06	-0.04	-0.08
社会的活動	-0.09	-0.08	-0.09	-0.06

出所:『社会生活基本調査』匿名データから筆者作成.

注)相関係数は『社会生活基本調査』匿名データの人口乗率でウエイト付けして算出している.

付表 生活行動の具体的な内容

行動の種類	内容例示	備考
睡眠	夜間の睡眠, 昼寝, 仮眠	・就寝から起床までの時間をいう。 ・うたたねは「休養・くつろぎ」とした。
仕事	通常の仕事, 仕事の準備・後片付け, 残業, 自宅に持ち帰ってする仕事, アルバイト, 内職, 自家営	・本人又は自家の収入を伴う仕事をいう。 ・休憩時間などのために仕事をしない時間は除く。
家事	炊事, 食後の後片付け, 掃除, ごみ捨て, 洗濯, アイロンかけ, つくろいもの, ふとん干し, 衣類の整理・片付け, 家族の身の回りの世話, 家計簿の記入, 庭の草取り, 銀行・市役所等の用事, 車の手入れ, 家具の修繕	・通勤・通学者などの送迎を含む。
育児	乳児のおむつの取り替え, 乳幼児の世話, 子供の付添い, 子供の勉強の相手, 授業参観, 子供の遊びの相手, 運動会の応援	・子供の教育に関する行動を含む。 ・就学後の子供の身の回りの世話は「家事」とした。 ・運動会に参加した場合は「スポーツ」とした。
テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	テレビ・ラジオの視聴, 新聞・雑誌の購読	・テレビから録画したビデオの視聴を含む。 ・テレビ(録画を含む.)・ラジオ(録音を含む.)・新聞・雑誌による学習・研究は「学習・研究」とした。 ・購入・レンタル等によるビデオの視聴は、「学習・研究」又は「趣味・娯楽」などとした。
趣味・娯楽	映画・美術・スポーツ等の観覧・鑑賞, クラブ活動・部活動で行う楽器の演奏, 手芸, 華道, 園芸, ペット等の世話, 麻雀, 趣味としての読書, ドライブ, 観光地の見物, テレビゲーム	
スポーツ	各種競技会, 全身運動を伴う遊び, 家庭での美容体操, 運動会, クラブ活動・部活動で行う野球等(学生が授業などで行うスポーツを除く.)	・運動としての散歩を含む。
ボランティア活動・社会参加活動	道路や公園の清掃, 施設の慰問, 点訳・手話, 災害地等への救援物資の調達, 福祉の集い・バザーの開催, 献血, 高齢者の日常生活の手助け, 民生委員活動, 婦人活動, 青少年活動, 労働運動, 政治活動, 宗教活動, 子供会の活動, 美術館ガイド, リサイクル運動, 交通安全運動	・自分の所属する町内会・PTA・同業者団体のために行う世話を含む。 ・自分の所属する地域・団体で行うバザー, お祭り, 運動会等への単なる参加は「買い物」, 「趣味・娯楽」, 「スポーツ」などとした。

出所：2001年『社会生活基本調査 調査票の記入の仕方』より抜粋・加工。